
研究ノート

エッセと判断

——トマスの判断論への一考察——

花井 一 典

トマスは命題の機能を「エッセの表示」(*Per. Her.* n. 108)にあるとしている。ここにいうエッセは「本性上、命題より先なるもの」とされ、また「実在世界にある *esse in rerum natura*」(*ibid.*, n. 111) と言い換えられてもいるように、実在的エッセ (*esse naturale*) を指す。一方、命題構成成分としてのエッセからみるとその第一義的機能は、端的な (*simpliciter dictum*) エッセ——素朴に解すれば「がある」——による「現実性 *actualitas*」, 「現実にある *actu esse*」つまり *actus essendi* の表示にあり、繫辞「である」の結合機能はそれから派生する副義であった (*ibid.*, n. 73)。

ところでトマスによれば、エッセの本義である *esse rei=actus essendi* を知性が類同化 (*similatio*) により受容 (*accipere*) し、実在的事物との合致、対応を実現するところに判断の真理が成立する (*I. Sent.*, ds. 19, q. 5, a. 1c. & ad 7)。つまり、判断の真理は *res* の「何であるか」=エッセンチアを把握する第一作用にではなく、実在的エッセを把握する第二作用に存するのであるが、ここで注目すべきことに、「結合体のエッセは結合 (分離) により把握されるほかない」と言明している (*ibid.*, ds. 38, q. 1, a. 3, ad 2)。通常の判断が繫辞による主述の結合の形態をとることからしてここにいう「結合」は繫辞的判断に於ける主述結合と解して差し障りなく思われるが、繫辞的結合は何故に合致の基盤とされる *actus essendi* の把握たり得るのであろうか。 *actus essendi* は「端的なエッセ」=「がある」の表示するところであり、繫辞の言語形式「である」

と直接には結びつかないことがトマスの先の言明を不透明なものにしている。

I

この問題の解決を図る或る解釈によれば¹⁾、ポエチウスを通して分有思想に接し進展をみせた後期トマスの考え方では、第二作用に於いて把握されるものはもはや先述の前期トマスにいう *esse rei* ではなく、命題成立を問う *an est* に答えるところの *aliquid esse* である (cf. *ST. II/II, q. 83, a. 1*). すなわち、第一作用により与えられる S, P から成る命題的事態 (S—P) の成立、真理 (*est*) がこのフレーズに表現されていることになり、こうして把握 (ないし思念) された命題から知性は *actus essendi* を志向する。ここでは *aliquid esse* の〈*esse*〉は事態成立を語る「繫辞」としてそれ自体に述語内容 (P) を宿しており、命題成立に「がある」容喙の余地はない。が、この解釈の難は次の三点にある。

(イ) 後期にあって *esse rei* は、なるほど第二作用に於いて「把握される」とは明言されていないものの、やはり「真理の原因」であると規定されており (*ST. I, q. 16, a. 1, ad 3*)、したがっていかなる命題も *actus essendi* に依拠することなしには真理たり得ない。

(ロ) *aliquid esse* は近代西洋型統辞法の通念から、*aliquid* を命題の主語 S とする「S が (P で) あること」の意味に解され易いが、トマスは別の箇所、動詞を含む述語全てに於いて *aliquid esse* が表示されている、と言っている (*In Met., n. 893*)。ここで *aliquid* を S とみなすことは主語を述語の部分とでも付会しない限りできない相談であるが、ではこの場合 *aliquid* を述語 P に見立てるとどうかといえば、そうした不用意な推断を拒む事情がここに伏在しており、やがて見るように、*aliquid* は *Pness est* (=S est P) における *Pness* と解されねばならないのである。

(ハ) さらに *aliquid* を *Pness* と解するこの読み方は、『神学大全 I』(q. 16, a. 2) における判断成立場面の記述からも支持される。そこでは “*iudicat rem ita se habere sicut est forma quam de re apprehendit, tunc primo ……*” と、「形相がある」の定式が判断の基盤として語られているが、この定式中の「形相」は、あらゆる命題に於いて述語により表示される (*aliquam formam significatam per praedicatum*) ものとして考えられており、(ロ) に予告した *Pness est* の形式がここにそのまま見出される。

さてこの言語形式についてはあまり注目されていないようであるが²⁹、トマスは言明された実在的エッセを、繫辞に依る述語「兼有的述語 *praedicatum accidentale*」と区別して「本有的述語 *praedicatum substantiale*」と呼び、その実例に「人間がある／*Homo est*」と並んで「色がある／*Color est*」を挙げている (*II. Sent.*, ds. 34, q. 1, a. 1) …… (日本語との兼ね合いその他の事情から「色」は「熱 *calor*」に代える)。古典語、露語に健在な表現形式 *P nescit est* が、「熱」のような偶有性を主語とする用法——*Clamor est = Clamant* を思え——に限って近代以降の西洋語からあらかた姿を消していることは³⁰、言語史的興味はさておき、*actus essendi* の、したがってまたさしあたり判断論の解釈のうえで深刻な問題であると言わねばならない。繫辞を介さない言表「熱がある」は、実在的エッセを構成するエッセンチア (ないし形相) と実在的エッセを、後者の本義「現実性」に即して表出しており、その真価を味わうためには、まず「がある」をエクシステンチアから解放し³¹、「実在するもの」即「主語の対象」、及びこれと背中合わせの「述語」即「一般概念」といった近代以降の (比較言語学的には特殊な *syntax* に並行する) 暗黙の思考図式は一旦排除してかからなければならないからである。エッセは知性にとって、視覚に対する色、聴覚に対する音に相当する固有対象であり、知性の最も熟知せるもの (*notissimum*) であった…… (その含蓄するところは容易に端俣すべからざるものがあると考えるがいまは措く)。しかしそれは判断を通して認識されたものではない。エッセを構成するエッセンチアとエッセそれぞれの把握 (第一・第二作用) により判断が成立すると言われている以上、エッセそれ自体の把握にまで判断の関与する余地はないからである (関与すれば再びエッセを必要とし無限背進に陥る)。いまは、*actus essendi* を構成成分とする、あらゆる判断的知識の萌芽がトマスの考えるエッセであると解しておいていいだろう。そのようなエッセの内部構造を主述の形式で言明したものが先の「熱がある」なのである。実在的エッセはエッセンチアと相関的に *actus essentiae* として思考されていたように (*I. Sent.*, ds. 33, q. 1, a. 1), 実在的エッセを表示する本有的述語「がある」も、偶有的エッセンチアを含むエッセンチア一般を現実化し実在的エッセたらしめる述語として理解さるべきであろう。述語の内実を概念とのみ解して憚らない風のある時代に向けて言い換えるなら、それは、述語的概念をして (直説法命題における) 現実的述語たらしめる「述語の述語」³² と呼ばれるにふさわしい。

このように aliquid esse は繫辞を介する通常の命題ではなく、そうした命題に於ける述語一般の基盤を「エッセンチアとエッセ」の形に定式化したものであるから、われわれの関心は自然、それが繫辞的判断と結びつく場面へと向けられるが、ここで重要な意義を帯びてくるのは、トマスが actus essendi を有するエンスを、カテゴリア（述語づけ）により分類されるエンスとして考えていることである。

II

トマスは実在的エッセの説明にあたり好んで、アリストテレス『形而上学』巻Ⅰ(1017a 22-30)に名高い、十の範疇に分類される「自体的エンス ens secundum se」を引証する。しかし範疇の分類は周知のように繫辞に即してなされており、通説ではこの箇所は「繫辞の意味分類」の典拠とされているだけに、トマスの真意は俄かには量り難い。まずエンス全体の区分けから概観してみよう。

- (1) 偶有的エンス……「その人間は教養的である」「白いものが教養的である」のように偶然的に合体したエンス。
- (2) 自体的エンス……実体、質、量など、カテゴリアにより分類されるエンス。
- (3) 真理のエンス……命題において繫辞により肯定的に語られる限りのエンス。「盲目」などの欠如態、架空の事物もこの意味ではエンスである。
- (4) 現実態と可能態のエンス……(2)のエンスを、それが現実的であるか可能的であるかによりさらに二分したもの。

※※このうち(1)は本来、学の対象ではなく、(4)は(2)をさらに二分したものであるから(2)に一括される。それ故、トマスによるエンスないしエッセの意義区分は(2)の実在的エッセと(3)の命題真理のエッセとに大別される。

(2)のカテゴリア分類が actus essendi の分類意義を担う理由として、繫辞的判断に対応する事態の成立を挙げることも考えられるが、事態(S-P)の成立そのものに Pness est が構成的に関わっている事情(この点の要略は註(5)参照)に鑑みれば、actus essendi が繫辞に接続する経緯への説明を避けては通れない、このあたりトマスには自明であったせいばかりかあまり言を費していないが、論定の鍵はトマス自身がこの一節に施す釈義(*In Met.*, n. 890)にあるかと思う。ただし釈義の対象となるその一節をめぐっては当今のアリストテレス研究者の間でも解釈が分かれているようであり、トマ

スによる解釈の方位を見定めるためにも予め最低限の鳥瞰図が必要である。まず問題の「自体的エンス」をめぐる叙述を、トマスの読み方を考慮に入れながらメルベケ訳から訳出する。

「それ自体に於いてエッセすると語られるのは、カテゴリアの型を意味するかぎりのエンスである。何故なら、エンスは語られる仕方に応じて、エッセを⁶⁾表示しているからだ (quoties enim [ens] dicitur, toties esse significat). 述語の或るものは実体の本質を、或るものは質を、或るものは量を、或るものは関係を、或るものは行為を(中略)表示している。これらの述語それぞれにとってエッセの趣旨はそれぞれ同一である。と(一般化して)いうのも〈Homo convalescit〉は〈Homo convalescens est〉と言っても変わらないからである」。

ここで「それ自体に於いてエッセする」と言われるエッセの本旨をめぐり、大別して三通りの解釈がある⁷⁾。

(A) エッセは繫辞を指し、述語の属する範疇に応じて繫辞の意味が異なる。〈Socrates est homo〉≠〈S. est albus〉…ポーニッツらに代表される古典的解釈。

(B) エッセは同一範疇に属する主述の必然的関係を表示する(つまり類を述語とする)繫辞であり、主述の属する範疇によりこれを結ぶ必然的関係の意味は異なる。〈Homo est animal〉≠〈Albedo est color〉……ロス。

(C) エッセは「述定内容 predicable」の exist——この語の通常の語法とは異なることに注意——の謂であり、その属する範疇により異なる述語づけの仕方が述定内容のエッセ(=exist)の意味基準の違いを成している。〈Man exists=Man is the essence of a substance〉≠〈The pallor exists=The pallor qualifies something〉……カーワン。

(A) では自体的エンスのエッセは繫辞として述語一般を主語と連結する機能を果たすことになり、確かに例文〈Homo convalescens est〉の説明には便利であるが、そうすると先の(1)に挙げられている偶然的エンスのエッセと区別する意味がなくなる。

(B) はその不都合を回避するため、同一範疇の主述関係に繫辞を限定したものだが、今度は先の同じ例文が偶然的述語に依っていることの説明に窮する。(C) は(A)(B)の陥るこうしたジレンマを回避すべく提出された解釈であるが、自体的エッセを繫辞ではなく「述定内容」自体の〈exist〉とした点に(A)(B)との大きな違いがあり、い

うところの〈exist〉の（とりわけ判断にまで達する）射程に説き及んでいないこと、さらに用語自体のこの場面での使用の適否などを不問に付すれば、まずはトマスと同方向に解釈を進めたものといえよう⁹⁾。

トマス自身の積義を仔細に見てみよう。述語づけの仕方 (*modus praedicandi*) はエンスの有するエッセの様態 (*modus essendi*) を明示しており、しかも、これに即応、準拠している (...*diversum modum praedicandi qui consequitur diversum modum essendi*)。ここでは自体的エンスのエッセは繫辞ではなく、その基盤となる実在的エッセである。実在的エッセを有する実在的エンスは、「十の範疇に分類される限りのエッセンチアを指す」(*I. Sent.*, ds. 19, q. 5, a. 1, ad1) とも講じられるように、エッセを受けたエッセンチア（さしあたりカーワンの言う *predicable*）のことであり、それぞれのエッセンチア（人間、熱、……）の現実化を意味するエッセの、その様態が、これらエッセンチアが述語表示されるための拠り所となっている。「熱い *calidus*」がトマスにとって、内属という（エッセの）様態のもとに (*per modum inhaerentiae*) 表示されたエッセンチア「熱 *calor*」以外のものではなかった (*In Met.*, n. 894) ことあらためて注意が必要である。

ここで先のカーワン説との重大な相違点を指摘しておく、解釈の焦点をなす「エンスが語られる仕方に応じてエッセが表示される」の一節が「何かが述語となる仕方に応じてその何かがあることが表示される *quot modis aliquid praedicatur, tot modis aliquid esse significatur*」と敷衍されることに端的に示されるように、繫辞による述語づけの仕方はその拠り所となるエッセを様態に即して告げているにすぎず、カーワンの言うように述語づけそれ自体が (*predicable* の) エッセの実質的な意味基準を成すわけではない。actus essendi の典拠にこの箇所が挙げられるのもこのような解釈視点からである。

III

さて、かねてより問題の *aliquid esse* は *aliquid praedicari* と様態 (*modus*) の面に対応するものとして考えられている。既述のように、そこにいう〈esse〉は述語の表示するエッセンチア (Pness) の *actus essendi* のことであるが、エッセそれ自体はあらゆる様態に共通するもので様態に関しては不定であり (*I. Sent.*, ds. 23, q. 1, a. 1),

それ自体が繫辞に即した特定様態を示すものではない。特定様態はもとエッセンチアに起因するものだからである (determinatum modum essendi, qui fundatur in ipsa essentia rei/*De Ver.*, q. 21, a. 1)。つまり、「エッセンチアがある」の形で把握された *actus essendi* は、そのエッセンチアの実体的であるか偶有的であるかによりやがて自存 (*per se esse*) と内属 (*in alio esse*) の様態へと辨別されるのではあるが、それ自体としては様態まして内属先に関して無記なるものでしかない。であれば、エッセからすべての命題を直ちに認識し得ない人間知性の把握する *aliquid esse* は、未だ〈S est P〉の命題構造を備えたもの (*enuntiabilia*) ではありません、やがてそうした命題に於いて様態を特定されつつ語り出されるべき (述語の) 実在的基盤として把握されているのである。またそう見れば、実在的エッセの様態辨別がその手引きを、「端的なエッセ」=「がある」にではなく、カテゴリに於ける繫辞「である」にもとめた理由も判然としよう。

「熱」を例に繫辞的判断の成立過程を辿ると、知性は第二作用「*esse rei* の把握」の遂行にあたり、様態の点では不定な (熱の) *actus essendi* を「がある」の形で把握し、さらに偶有的エッセンチアに応じた様態を加味しその「がある」を「内属」的「がある」として辨別する⁹⁾。その内属の充的な把握はしかしエッセンチアの内属先=基体の特定を経ねばならず、それは基体と「熱」の繫辞的結合を俟って実現される。トマスが「結合体のエッセは結合 (分離) により把握されるほかない」(既出) と言うとき、厳密にはこうした「充的な把握」のことと解される。このように (1) エッセの特定態 (2) その内属先 S, 双方の明示により *Pness* の *actus essendi*¹⁰⁾ を自己限定の相のもとに齎したものが判断〈S est P〉にはかならず、主述の結合は「がある」の把握に立脚したその明細化 (*specificatio*)¹¹⁾ として遂行されている。ここで *Pness est* 自体すでにエッセンチア *Pness* によるエッセの自己限定であることを考慮すると、トマスにあって判断及び命題は「エッセの自己限定の明示的把握」であると結論されるが、それはまた、われわれのいかなる判断的知識もエッセの自己限定の場所を措いては成立し得ないことを告げている。

註

- 1) Keller, A., *Sein oder Existenz* ?, 1968, p. 243 f. 及び Garceau, B., *Judicium*, 1968, p. 142 f.
- 2) トマス自身は地の文に常用する。“Sed cum essentia simplicis non sit recepta in materia, non potest ibi esse talis multiplicatio.” (*De ente et essentia*, IV)
- 3) 〈have〉の台頭と表裏をなす——It has a naive charm. (素朴な味がある)——と観測するが、哲学的分析の待たれる問題であろう。cf. Benveniste, É., 〈Être〉 et 〈Avoir〉 dans leurs fonctions linguistiques, *Problèmes de linguistique générale* I, 1966, ch. 16.
- 4) 印欧語本来の「がある」の実質的機能は、山田晶『トマス・アクィナスの〈エッセ〉研究』1978, 第39章に証示される, 「がある (エクシステンチア)」「である」を含めた「あるの現実態」の表示にあると考える。
- 5) その面目が *Est quod S-P* (P の Mood=接続法に注目) でのふるまいに見られ印欧語の共有する「直説法」の深層部を窺わせるが、そこで主題的に表明されるのは Pness の内属の「現実性」であり、Pness est の変奏であることは覆い難い。再度、地の文から引く。“Quod ergo anima *elevetur* usque ad supremum intelligibilium (sc. Deum) ...esse non potest” (*ST*. I, q. 12, a 11) ←*elevatio* (animae usque...) esse non potest なお仏語 *n'est-ce pas?* もこの系統を引くが、変形文法家 T. ランゲンドンは、直説法の内部分節たる「時制」を変形以前の文の深層構造において、〈S-P〉全体を変項とする単項述語——いわば文の最終述語——と見ることを提案する (『英語変形文法の要点』今井邦彦訳, 1972, p. 200-2)。
- 6) 以下の註釈家が揃って主語 (esse significans) と解する「エッセ」を、トマスは半ば平然と significat の客語と読み下す。
- 7) Bonitz, H., *Aristotelis Metaphysica, Commentarius*, 1849, repr. 1960, p. 241, Ross, W. D., *Ar.'s Metaphysics*, 1924, vol. I, p. 306 ff., Kirwan, C., *Ar.'s Metaphysics, Books ΓΔ E*, 1971, p 140 ff. に拠る。
- 8) そこにトマスへの言及は見られないが。
- 9) ここから振り返ってみるとポーニッツの次の評言にもまた違った妙味がある。“quasi ipsa copula adsciscat praedicatorum...vim et discrimina” (*ibid.*)
- 10) アウグスチヌスの真理概念=id quod est がまず「真理の基盤」を指すと判別されるのも (*De Ver.* q. 1, a 1), id を Pness に置き換えてみれば容易に納得されよう。なお *Per. Her.*, n. 112 は、命題より先なる quod est の内実をそのように講説している。
- 11) cf. “iudicare ita esse in re..., quod est componere...,” (*ibid.* n. 31)

[略号]

Sent. /In IV Libros Sententiarum P. Lombardi.

Per. Her. /In Aristotelis Libros Peri Hermeneias.

De Ver. /Quaestiones Disputatae De Veritate.

In Met. /In XII Libros Metaphysicorum Aristotelis.

ST/Summa Theologica